

平成21年度第1回定例会

日 時： 平成21年5月25日（月）午前9時30分～

場 所： 本館 講座室

---

(会長) 協議の「多摩市における中央図書館機能およびその整備のあり方について」、前回の定例会でお願いした意見について、まとめたものが配布された。「1 社会全体の動向と多摩市の未来」から、だいたい同じような傾向の意見が感じられている。

(委員) 図書館だけではなく、多摩市全体をみる必要がある。調布の図書館は、障害者のサービスとして宅配をやっている。多摩市ではどのくらい実施しているか。

(事務局) 多摩市も障がい者の宅配サービスは実施しており、ボランティアにお願いしているが、高齢者についても問題意識はあり、検討中である。庁内全体の意識としても、ひきこもりがちの方をどうしていくか、本当にこれなのではなく、外に出ていただくにはどうしたらいいか、そういったことも重要である。

(会長) 高齢者に外へ出てきていただくことにより、コミュニケーションが図れる。図書館まで遠いなら仕組みをつくり、途中の学校を利用するといったこともある。

(委員) 各委員の思案にほぼ重なるものも多いが、異なる見方もあると、教えられることもあった。図書館というのは、行政の中では教育委員会に属していると思うが、行政の中で独立性の強い世界を構築していくところがあると、知的・情緒的なひとつの殿堂として推進力になっていく夢を描いていくのもいかがか。

(委員) 答申、報告で指摘されていることは、実践されていない。それらを積み残して協議しても、また繰り返す。理念を高く持ちながら、現実的な改善を実現していくということを求めなければならない。中央図書館をつくるという構想も、できない可能性もあり得るので、その理念に近づけるために、臨時的なこの建物を中央図書館の根拠地として、緑の森の中に「本の家」を作り上げていく。交通の便を工夫し、パルテノン多摩と図書館と一体化して考えていくと、イメージを作りやすいと思う。

(副会長) 今後は実生活に役立ち、使われ、日常の生活に溶け込む図書館に対し満足度を求められるのではないか。図書館を誇れる街になってほしい。

(会長) 理想的だがそれを超えるハードルは高い。より多くの利用者層を受け入れられることにより、図書館が変革していく礎になるうかと思う

(委員) 図書館のレファレンスの許容範囲がわからない。どこまで質問してい

いのかを誰でもわかることばで表現して欲しい。

(委員)

ここでいいものを出しても、実現するかどうかは市長が納得しないと無理である。図書館に縁のない方も含め、かなりの方が納得するものを出していかないと、だめではないか。そういった意味で、地域づくりの観点でどのように考えていくか。若い方が魅力を感じる、子育てということで、人をひきつけるこの街のセールスポイントは何か。恵まれた自然環境、教育水準も高い。多摩センターを中心に、パルテノン多摩は多摩市ならではの文化施設である。その裏に大きな公園があり、その向こうに図書館がある。そういったものと複合して「文化都市多摩ニュータウン（多摩市）」というものができあがってくる。スケールを大きく打ち出さないと、なるほどとだけ思っただけなのではないか。まちづくりに図書館を活かす、例えば休日の過ごし方として、お母さんは買い物にお父さんはスポーツジムに、子どもは図書館にといった、センターの中に図書館があるということが、魅力的なまちづくりになると聞いた。ただ図書館で本を借りることだけではなく、憩いの場として連動した企画がしていけると魅力ある図書館づくりにしていけるのではないかと。

(委員)

ひとつは多摩市の未来を描いたとき、図書館のあり方をどのようにイメージするのか。図書館は、本の媒介から情報や文化を提供したり、センター的な役割を果たすようになり、図書館から文化センター的なイメージに変わっていく必要がある。二つめはどのくらいの人が利用しているか。多摩市民が、ひとりももれなく利用してもらえるよう目指すべきなのか、利用している方にとって必要なあり方を考えていくべきなのか。3つめの視点は、図書館協議会は図書館のあり方を考えるが、市の未来像を考える方にとっては、図書館の未来像も大切だが、市全体の中では図書館のあり方はごく一部分である。トータル的に、市全体の財政、方向性をみながら、その中で図書館、文化に関する部分を抱き合わせて考えていく必要がある。

(会長)

図書館が変わるべき時期であるかと思う。行政としては予算的なことが優先である。できることから工夫してやっていき、それがきっかけとなって5、10年後の図書館像がすばらしいものになるためのワンステップとなればと思う。図書館協議会が1年かけて意見を集約して提出するというプロセスが評価されるべきであって、それを行政がどのように取り扱うかは我々が知るべきことではない。

(委員)

PFI制度について、稲城市が導入していると聞いたが、検証する必要があると思う。財政事情を考えるとそのほうが節約できると言われているし、運用がフレキシブルにやれることを考えると、検討の余地はあると思うので、その視点も加えた方がいいか。本を買うのに、新刊のみ

を購入するのではなく、古本屋等から購入するやり方もある。市民の寄贈はけっこう多い。図書館に自分も本を納めたという親近感がわくのではないか。

(委員) 7から8割は使えないものだ。図書館、寄贈でいらなくなった本は承諾を得て、リサイクルとして提供している。

(委員) ゴミの中にも、宝があるかもしれないので、ルールを作って持ってきてもらう。迷惑だからいらぬといわれてしまうと、図書館が縁遠くなってしまうので、仕組み作りをすればいいと思う。

(会長) リクエストで待っている本があり、古本屋で買ってきて収めれば少しは早く読めるといったこともある。ただリクエストの件数を見ていると、新聞に載っているベストセラーに載っているものばかりである。後押ししたくても、複雑な思いである。自分でこれはよい本だと思ったものを図書館に運んで、選んでもらうとよいと思う。

(委員) 委員の意見のまとめは答申のための資料としてとどまるのか、これを踏まえてこういう柱を立ててそれを中心に検討し、方向性が出てくるものなのか、掴みかねている。

(委員) 答申は手段であり、目標になってはいけない。答申しつつも、前の図書館協議会から繋がってそれを進めていくことが、大事ではないか。

(会長) 答申の受け止められ方が大事なのではなく、それは行政の問題である。

(委員) 手段を目的化しないように、採択されるように働きかけなければならない。

(会長) 骨子はこのように従って、意見は趣旨選択しながら委員で協働作業して進めていかななくてはならないし、任期の中で答申を出すことが、図書館協議会委員の義務である。

(委員) 臨時的な本館を中央図書館化する、というような現時的なことを打ち出すことはできないのだろうか。

(会長) 答申に盛り込むことはできる。

(委員) この場所で、真剣に議論するといった題材に適切かどうかということを含め、考えることが必要だ。

(事務局) (答申のあり方について、説明)

(委員) いかに生かされる答申をつくるかということにつける。答申の中心は、中央図書館をつくるかつくらぬのかに絞ってやったらいいのではないか。中央図書館ができなくて仮にこの本館でも、実現できることはあるだろうし、ここで議論されたことは図書館に反映されることがあるかと思う。焦点を絞り、この意見等に沿った柱をたて、やっていったらいいのではないか。中央図書館を建てるのかどうか、建てるのならど

ここに建てるのか、その性格はどうするのか、それを大きな柱で進めることに賛成である。

(事務局) 図書館の3大要素は、資料、人、建物であり、また機能を加える場合もある。これらが響きあって機能されるものであり、逆から言えばその機能が生まれるのなら、その建物はどんなものか。実際ハードをどうするかというのは、何をもちて中央図書館と呼ぶにふさわしいものになるかということだ。

(会長) 廃校になった学校を利用した図書館のあり方は、実際に充実し機能を持っていけばいいのだから、付加できるなら、ここを中央図書館ということが可能である。理想はあるがそれが通るとは限らないのが現実であり、それに向かって一筋の夢を描きながら間をすり抜けていくような、そのような形の持っていく方しかやりがないと思う。骨としては、資料の意見を中心にやっていきたいと思う。

(副会長) 図書館はどのような機能があれば中央図書館といえるのか、どういう図書館を望み、それを実現するにはどうあったらいいのか。建てる、建てないは別にし、中央図書館としてはこういうものが欲しいといったところを話あっていかないと、中身の問題に時間をかけるべきだ。

(委員) 現本館の理想化した中央図書館に限りなく近づけていくためのそのような答申を出すと、現実的な受け取りが可能ではないか。何もなしどころに中央図書館を建て、理想的なものというような答申だと、聞いただけでも無理ではないか。この建物はゆるやかなスペースの書庫化とし、別に大きな建物を建て閲覧化し、芝生を植えて、パルテノン多摩から中央公園と合わせて文化的にかもし出す環境の方向を考える方が、現実性があるのではないか。それを含めて討論の議題とし、答申の中に活かしていただければいいかと思う。

(委員) ひとつは多摩市の図書館のこれからの短期的、中期的、長期的な方向性を示す。二つ目は中央図書館のあり方である。センター的な役割の図書館をどこにもってくるか、交通の問題、蔵書数、施設、一番大切なのは、館長を含め職員が管理を含んだものをどこにもってくるかということである。

(委員) せっかくこの各委員の意見のまとめが出ているので、この資料の順番にいくのかと思っていたが、1の「社会全体の動向と多摩市の未来」でストップしてしまった。話しやすいところから協議していかないと、いつまでも未来を話していても、期限もあることである。先にできるところから協議し、ある程度素地をつくってからそのことに入ってもいいのではないか。

(委員) 図書館では、多摩市在住の著名人の一覧はあるか。

- (事務局) だいたい把握している。
- (委員) 特色のある資料となると、多摩市の独特のものをつくるべきかと思う。
- (事務局) 次回までに、どのように扱っているかという資料を出したい。
- (委員) 前回の答申のキーワードは市民協働といったように、中心の柱があれば個性がでる。前と変わらないような答申なら、これを読んで改善した方が早い。中央図書館的な現実性のある、この今ある建物を充実するというのを、ひとつの方向性をつくっていく上ではいいと思うが。
- (会長) 前回の行政から諮問され答申した市民協働について、行政として実現できるか。
- (事務局) リレートークや、市民企画展示などで協力いただいている。市民協働について、どのように反映されているかということも、次回出ささせていただく。
- (委員) 今回は、大きく柱を立てた、本館を中央図書館化する現実性のあるプランの構築を出すことは、いい選択だと思うが。
- (副会長) 本館はあくまでも本館であり、最初からそれを中央図書館に結び付けていこうとするのは、反対である。どういう役割を求めている、どのようなサービスが必要か話し合った上である。多摩市の図書館構想は、分館からそして最後に中央図書館ということであるが、財政状況等からうやむやになり、必要かどうかという検討になったと思う。
- (委員) 反対であると言う意見はあっていい。議論していくことが大事である。
- (委員) 中央図書館の例を教えて欲しい。
- (委員) (調布市の中央図書館の説明)
- (委員) 聖蹟桜ヶ丘の駅前の位置で、スペースは3、4倍の広さで、蔵書、職員が機能することを兼ね備えることを考えればいいということだ。
- (事務局) (多摩市の図書館構想の説明)
- (委員) 今の説明で、方向性としては新しいところをつくるか、ここにするか2つに1つしかない。中央図書館のイメージとして、参考例があると思うので、出していただきたい。
- (委員) 学校図書館について、学校、司書の数等の一覧も用意して欲しい。
- (委員) 永山駅の、図書館の案内を直して欲しい。
- (委員) この場所の暫定的な使用の中で、中央図書館化と同時に、本館の改善もある。10年間の中で中央図書館的な機能を代行するような面もある。何らかの改良は講じてもいいのではないか。答申の中に盛り込みつつ、現実に改善するというのを議論していただきたい。
- (会長) これで終了する。

